

News Letter

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■ 活動報告	P4
● 西洋演劇研究コース	
● 東洋演劇研究コース	P5
● 舞踊研究コース	
● 芸術文化環境研究コース	P6
● 日本演劇研究コース	
● 映像研究コース	P7
■ 新刊紹介・イベントカレンダー	P8
2007年度博士論文成果報告会 編集後記	

ニュースレターの刊行に寄せて

グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」
拠点リーダー 竹本 幹夫

演劇博物館演劇研究センターは、本事業の前身である21世紀COE「演劇の総合的研究と演劇学の確立」において、すでに6号のニュースレターを刊行している。本誌はそれに続くものではあるが、新たな拠点の再出発を記念する意味で、グローバルCOE拠点ニュースレター第1号として刊行する。

実は私自身は、ニュースレターの刊行に、当初懐疑的であった。研究の実質ではなく、そのエッセンスの紹介に過ぎないのであれば、より克明な報告が演博COE事業のホームページ上に掲載されれば、それで十分ではないかと思っていたからである。限られた予算を有効に使用するという発想からは、ニュースレターの刊行はあり得ないというのが私の信念であった。21世紀COE事業の前拠点リーダーであった伊藤洋演劇博物館館長（当時）は、むしろ刊行に当初から積極的であられたが、私が金庫番のように振る舞って、言うことを聞かなかったというのが実情であった。

ところが21世紀COEの中間評価で、審査委員会からいくつかのご指摘を頂いた中に、「紙媒体での情報発信が少なすぎる」ということがあった。第一年度より毎年きちんとと大部のCOE紀要を刊行してきた上に、年間複数冊の単行本をも拠点から刊行していた我々としては、いささか当惑したが、それでもいろいろと対応策を考えた結果、唯一手つかずのまま残る紙媒体がニュースレターであった。そこで中間評価直後の4年目に入ってから遅まきながら第1号を刊行することとなった。そのために、年3回の刊行ではあったが、最終年度でわずかに六号を数えるに止まったのである。しかしながらこのニュースレターの刊行は無駄ではなかった。というよりは絶大な効果を発揮したのである。年間150回にも及ぶ大小の研究活動は、逐一ホームページ上に紹介され、そのホームページは年間で300～400万件といううなぎ上りのアクセス数を記録したのではあったが、紙媒体による情報発信の威力はさらにそれを上回った。ニュースレターをごらんになった多くの方々から、拠点の活動に対するお褒めの言葉を直接頂くことがしばしばあったのである。そのうえ何よりもニュースレターの恩恵を受

けたのは、ほかならぬ我々であった。あまりに膨大な成果を簡潔にまとめ直した記録として、拠点内部の情報交流にとっても、また成果報告の時にも、本誌は非常に有用であった。

このたび新たにニュースレターを、グローバルCOE事業「演劇・映像の国際的教育研究拠点」として刊行するのは、もちろんこのような経験をふまえてのことである。とりわけ、このたびのプログラムは、演劇学と映像学との協同による新研究の創出に大きな眼目が置かれている。演劇学と映像学とは、ほとんど隣同士というよりは、外から見れば同類の研究分野と思われるがちである。映画俳優が舞台に出たり、演劇人が映画を作ったりする事例を見ては、多くの方がそのように思われるのは当然であるが、実は俳優術一つとっても、演劇舞台における演技のあり方と、映画における俳優の身の処し方とは、黒白の違いがある。これは観客が直接舞台を見るのか、監督の眼差しを通した映像を見るのかの違いである。従って、内側からすれば、演劇学と映像学とはまったく別物なのである。全く別物という意識に立つ限り、両者の学問的交流はきわめて難しいことになる。これが従来の一般的なあり方であった。

我々の課題は、この壁を乗り越えた先に、新しい分野を開拓することにある。言うは易く行うは難い大事業であるが、自ら提案し、国より付託された研究事業であるからには、これを実現することが我々の約束であり、つとめである。この大事業の実現のために、本誌がよりよい協同作業のための基本情報の提供者たり得れば、何よりである。これまでの経験から、本誌がそうした研究情報の交流にも大きな力を発揮することは疑いない。前プログラムの中間報告でのご指摘が、このような形で実を結ぶことになるのは、当初は消極的な姿勢であっただけに、私としては面はゆい限りながら、今後ともこのニュースレターが、若手研究者による演劇・映像研究にとって、よりよい情報の提供者であり続けることを、新たな決意をもって約束したい。



2007年12月7日～9日の三日間、 早稲田大学大隈小講堂において、 国際研究集会「散楽と仮面」が開催された。

当日の発表内容は、下記の通りである。



■ 2007年12月7日 「日本の古典的仮面劇」

- 基調講演「散楽と仮面」 竹本幹夫（早稲田大学）
- 研究発表「能・狂言面データベースの課題と可能性」 大谷節子（神戸女子大学教授）
- 研究発表「鬼神面の系譜」 宮本圭造（大阪学院大学）
- 研究発表「歌舞能形成における能面の役割」 三宅晶子（横浜国立大学）
- 研究発表「時代別に見る能面の変遷」 江口文恵（早稲田大学）
- 研究発表「多武峰常行堂修正会の『翁』は摩多羅神にあらず—翁系仮面研究序説」 天野文雄（大阪大学）
- 研究発表「越境の場としての仮面：狂言とコメディ・デラルテにおける人間性の超越」 スタンカ・ショルツ・チョンカ（トリア大学）

■ 2007年12月8日 「中国を中心とするアジアの仮面劇」

- 基調講演「中国における仮面芸能の諸相」 細井尚子（立教大学）
- 研究発表「中国の古代祭礼における仮面」 周華斌（中国伝媒大学）
- 研究発表「中国の中世演劇と仮面」 黄竹三（山西師範大学）
- 研究発表「演劇発生学における四目仮面—中・日・韓“方相氏”文化比較研究」 曹琳（江蘇省南通市文化局芸術研究所）
- 研究発表「朝鮮の仮面芸能とその系譜」 李應壽（世宗大学校）
- 研究発表「アジア密教圏の仮面—チベット・モンゴルの仮面舞儀礼チャム」 木村理子（東京大学）
- 研究発表「琉球文化における仮面芸能」 板谷 徹（沖縄県立芸術大学）

■ 2007年12月9日 「ヨーロッパ文化圏の仮面劇」

- 基調講演「ヨーロッパ、日本、世界の仮面」 ギュンター・ツォーベル（早稲田大学）
- 研究発表「ディオニソスの仮面」 コナー・ハンラティ（アテネ大学）
- 研究発表「古代ギリシャ仮面のインドにおける原型—東インドにおけるチョウの仮面と古代ギリシャ仮面の比較研究」 ゴウリ・ニラカント（ウィーガン&リー大学）
- 研究発表「演劇における『欺き』の象徴としての仮面—後期共和国ローマにおける仮面」 スタイン・ブッセル（ライデン大学）
- 研究発表「ウィーンの仮面に見るアルプスの民俗芸能」 フランツ・グリースホーファー（オーストリア民俗博物館）
- パネルディスカッション「演劇における仮面の意味」

主催：早稲田大学演劇博物館、

グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

助成：平成19年度日本学術振興会国際研究集会、早稲田大学国際会議等開催助成費、文部科学省特定領域研究東アジアの海域交通と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生BO1-10散策の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究

このたびの研究集会を通じて、中国と韓半島における仮面史・芸能史についての最新の情報がもたらされ、また西欧の仮面使用の歴史にも触れることにより、仮面における海外の事例と日本の事例とを比較することがはじめて可能となった。

全体の内容を総括すると、少なくともアジアにおいては、仮面・仮頭〈かとう〉は呪術面と芸能面とに大別できる。そして呪術面から祭儀面（宗教儀式で用いる面）へと展開する過程の中で、芸能面も発生した。それが祭儀と芸能との直接的な生成発展の関係を意味するとは断定できないが、今回紹介された多くの事例がその可能性を示唆している。ただし仮面を用いた祭儀はあるが純然たる娯楽芸能は育たなかった事例や、呪術面が存在せず、祭儀面のみしか確認できない事例も報告された。

今回の研究集会での成果と新知見、および今後の課題は以下の点に要約出来る。

一、上記の面着用原則が、例えば猿楽面の使用原則とどう関わるのか、または、日本における仮面芸能の展開にどう当てはめるのか、ということがある。西欧においては、古代ギリシア劇がすでに仮面を用いており、かなり早い段階で演劇が成立している点が、アジアと大きく異なる。古代ギリシア劇成立以前には仮面を用いた輪舞が行われていた由であり、こうした演技とアジアの仮面芸能との関連が疑われる。

二、仮面・仮頭の歴史を見るに、きわめて多くの古代芸能に、仮面・仮頭の使用が確認された。すなわち何かを演じる場合には、面を着用するという約束ごとが、歌舞的な身体芸術にはあった可能性がある。面の持つ呪術的な変身機能については、中国演劇関係の報告から十分に理解出来たところだが、ヨーロッパの面にもそれを適用できるのかどうか、韓半島や日本列島では、中国の影響下にあって独自の機能を仮面に付与することはあったのか、ということが問題となる。

三、仮面研究の将来像についての提案が行われた。演劇の道具としての面の研究方法は、従来しばしば演劇研究の一分野として位置付けられてきたがゆえに、仮面の物理的な特色についての研究はおろそかになっていた側面があった。今後はより実証的な仮面の成立年代考証の方法が模索されねばなるまい。そのためにはもう一度最初から、実物の仮面を実地調査・研究するというフィールドワークが不可欠である。

さらに、仮面・仮頭研究の新しい方法の開発が望まれる。例えば仮面研究に、文化財補修の専門家や仏教美術の研究者等、演劇分野以外の研究者の参加を仰ぐことや、モニター・ジュ写真の技術を援用して面の表情の分析を行い、サンプルをデータベース化して行くなどの新工夫も必要であろう。

特集記事 ②

報告

国際シンポジウム

「Stage to Screen —演劇から映画へ—」

2008年3月3日(月)・4日(火)・5日(水)

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的研究拠点」主催により、2008年3月3日、4日、5日の三日間に渡って、国際シンポジウム「Stage to Screen —演劇から映画へ—」が開催された。

1947年にニコラス・ヴァルダックによって記され、演劇と映画との影響関係を明らかにすることで、双方の領域の独自性をも明解に示した彼の古典的著作のタイトルから着想を得た本シンポジウムでは、初期映画の演劇的な起源を様々な観点から考察するという同著作の趣旨に照らして、演劇と映像の各領域に関して内外の研究者を招き、基調講演、研究発表、試写、ディスカッション等が連日行われた。

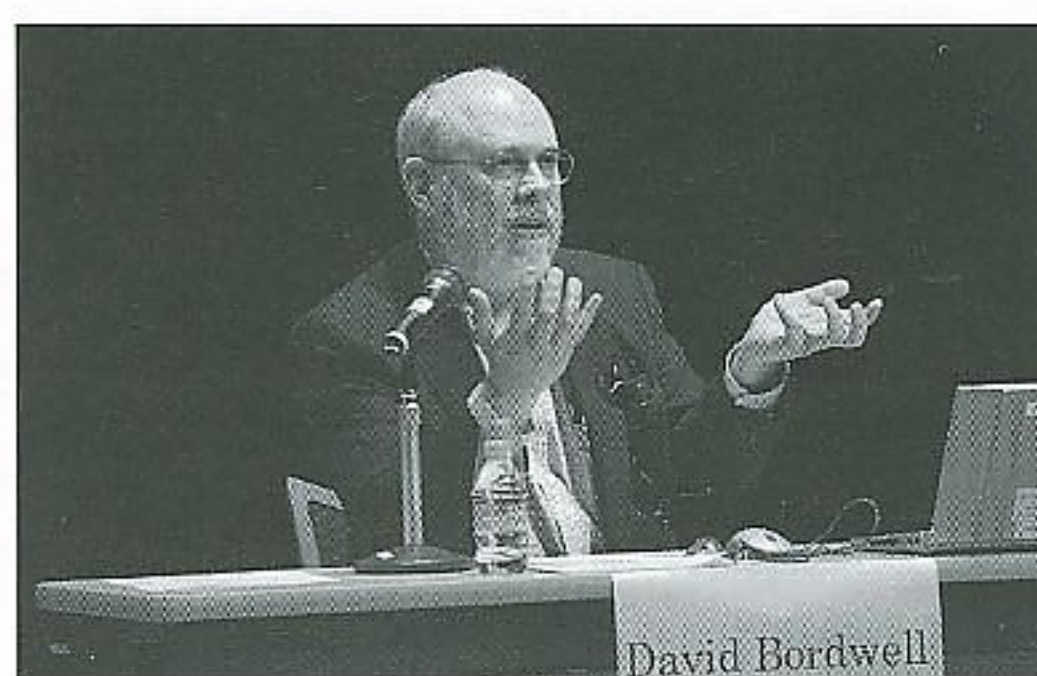
まず、3月3日については、ジャン・ミトリ賞を受賞する等、ロシアの初期映画研究の第一人者であるユーリ・ツイヴィアン教授(シカゴ大学)より、基調講演「映画によってなし得る演劇でなされ得ないものとは何か —1910年代の映画におけるフィルム・スタイルとメディアの固有性」がなされた。その後に、「演劇から映画へ —その歴史的考察」というテーマで、ツイヴィアン教授を囲んで、大阪大学大学院の永田靖教授、本学文学学術院の貝澤哉教授、小松弘教授の四名で、約一時間半のディスカッションが行われ、ロシアをめぐる演劇と映画との豊かな影響関係とその歴史的な意味等に関して様々な意見が交換された。

3月4日は、主としてグローバルCOE研究員を中心に若手研究者四名による研究発表が行われた。各発表は多岐に渡るもので、日本における映画と演劇とのメディアの性質及び、主題の相違、弁士のパフォーマンス性等との観点から、日本における「演劇から映画へ」に関する考察がなされた。また、演劇と映画の両メディアに渡って活躍した20世紀を代表する作家サミュエル・ベケットについても、有益な発表がなされた。特に若手研究者達にとっては貴重な研究発表の場となった。全ての発表の後には、小松弘教授、デイヴィッド・ボードウェル名誉教授、各教授によって、基調講演がなされた。小松教授からは「肉体なき俳優たち—無声映画における演劇的ファンタズマ」というタイトルで内外の映画作品を取り上げながらの詳細な歴史的考察が提示された。次に、すでにアメリカ映画のみならず映画史や映画理論を横断して多々大著を発表されており、世界の映画研究を代表する人物の一人と言えようボードウェル教授からは「負債と拒絶：映画の演劇に対する関係性についての諸説」というタイトルで、演劇と映画との歴史的な影響関係に関する各国の映画作家や映画理論家の諸説をもとに理論的な考察が示された。その後に、「演劇から映画へ —その理論的考察」というテーマで、ボードウェル教授、ツイヴィアン教授、小松弘教授、武田教授によってディスカッションが行われ、3日とは対照的に演劇と映画との影響関係について理論的な側面から様々な問題が考察された。

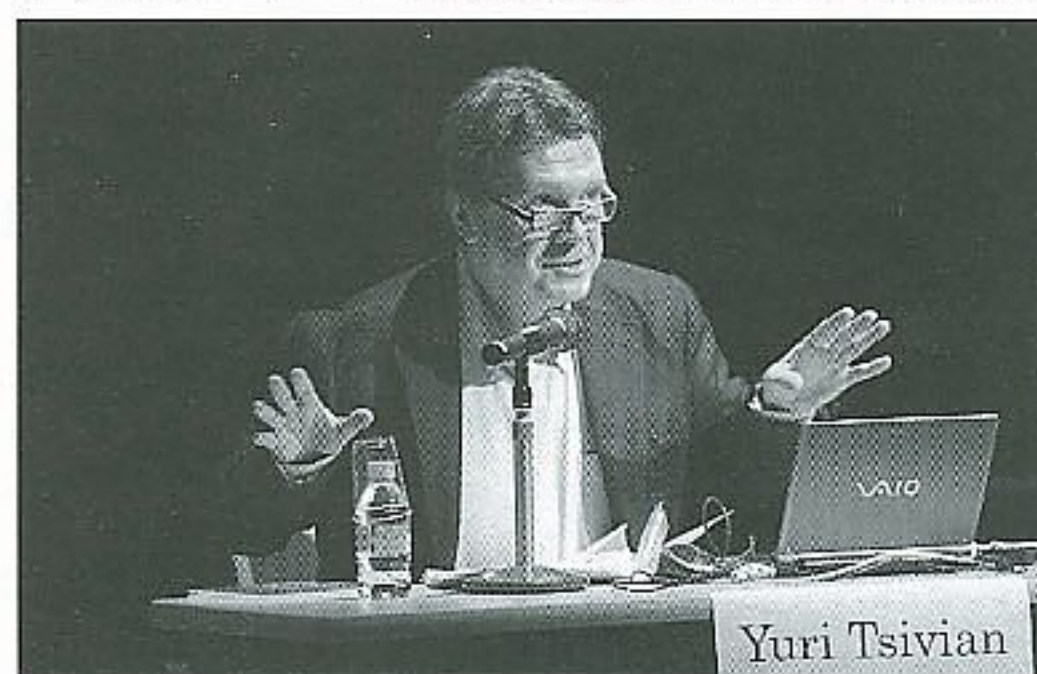
最終日である3月5日には、日本の初期映画史における「演劇から映画へ」が考察の対象となった。まず午前中には、参加者に対して、会場である東京国立近代美術館フィルムセンター小ホールにて、講談や歌舞伎の題材を主題とする現在では視聴が非常に困難である二作品、1915年に製作された天活作品『孝子五郎正宗』と、1922年に帝国キネマによって製作された『良弁杉』が上映された。次に、休憩を挟んだ午後は、会場を早稲田大学国際会議場第一会議室に移して、午前中の上映を踏まえながら、ボードウェル名誉教授、ツイヴィアン教授、そして特に歌舞伎研究の代表的な研究者である古井戸秀夫教授(東京大学)、児玉竜一准教授(日本女子大学)のお二人らを招いて、小松弘教授が中心となってディスカッションが行われた。国際的な映画学者達によるディスカッションは内外の映画祭等で頻繁に行われているが、しかしながら、このような形で映画学の世界的研究者と、日本の特異かつ独自の映画の様式や主題の様相が表現されている映画作品に関して、歌舞伎研究の優れた研究者が直接意見を交換する機会を持てたということは、今後の映画研究の発展だけでなく、未知の部分も多い初期の日本映画史研究の発展にとって、この上ない影響を与えると共に、若手研究者や映画学を志す学生に対しても大きな意味があることだろう。(客員研究助手 後藤大輔)



学学術院教授)



デイヴィッド・ボードウェル名誉教授(ウイスコンシン大学)



ユーリ・ツイヴィアン教授(シカゴ大学)

西洋演劇研究コースでは、第一線で活躍する演劇研究者や演出家、俳優などの実践者を国内外から招いて、多彩な催しを行っている。ここでは2007年度に開催された講演会やセミナーを紹介する。

■ ベケットゼミ特別講演会

講師：シェフ・フーパーマンズ氏（ライデン大学教授）
2007年 10月12日（金）18：30～20：00
西早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）

ベケット研究において著名なフーパーマンズ氏に、ベケット散文・演劇作品における水平運動と垂直運動の対比についてDVDなどの映像資料を交えてご講演頂いた。ベケットの作品には同じ場所を何度も往復し、水平性を強調する運動に対して、苦境からの脱出を示唆する垂直性への希望が対比される。どのような瞬間に垂直運動の可能性は現れるのか？フーパーマンズ氏の講演は参加者との活発な対話へと導き、イメージと運動における重要な考察を我々に促した。

■ 講演会「スタニスラフスキーと演劇革命」

講師：アナトリー・スメリャンスキー氏（モスクワ芸術座付属演劇大学学長）
2007年 11月7日（水）16：30～18：00
西早稲田キャンパス26号館（大隈記念タワー）302会議室

演劇学に関する国際的な学者であり、「スタニスラフスキー全集」の監修責任者でもあるスメリャンスキー氏に、スタニスラフスキーによって考案された演劇教育システムとその発展、現代演劇への影響をご講演いただいた。世界の演劇教育のスタンダードとされるスタニスラフスキー・システムとともに、政治的に困難な時代のロシア演劇が、着実に進歩した経緯が、ユーモアを交え生き生きと叙述された。

■ 演劇論講座「メディア社会の演出家—シュテファン・プーバーとミヒャエル・タールハイマー—」

講師：平田栄一朗氏（慶応大学文学部准教授）
2007年 11月30日（金）18：00～20：00
西早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）

この講演会は、本年度より開始されたグローバルCOEプログラムにおいて、西洋演劇研究コース演劇論講座の第1回として開催された。前年度までの21世紀COEで、毎年、著名な西洋演劇研究者をお招きした成果を踏まえ、今回は、新進気鋭の若手ドイツ演劇研究者をお招きすることにより、研究の更なる進展を期したものである。講演と貴重な映像によって、アクチュアルなドイツ演劇の知見を得るとともに、最新の研究動向に関する考察をも得ることができた。

■ ヴィデオレクチャー「演劇、人形、死／生—ジゼル・ヴィエンヌを迎えて」

講師：ジゼル・ヴィエンヌ氏（演出家）
2007年 12月7日（金）18：00～20：00
西早稲田キャンパス6号館318教室（レクチャールーム）

若くしてフランス演劇界を代表する演出家、ジゼル・ヴィエンヌ氏を迎えて、日本では未公開の作品を、映像によってご紹介い

ただいた。上映されたのは、7人の俳優と等身大の人形が登場し、氷雪を模した舞台美術と即興的な音楽による、死と美に彩られた独特の作風の演出作品である。演出家自身から、その発想の源、作品創造の方法論、哲学について伺うことにより、その作品の理解を深めるとともに、フランス演劇界の現在について考察する機会となった。

■ 研究集会「オペラが観た日本／日本が観たオペラ—黒船・夜明け・オリエンタリズム—」

第一部：若杉弘氏（新国立劇場オペラ芸術監督）に続いて
栗山昌良氏（演出家）による講演
第二部：小川さくえ氏（宮崎大学教授）片山杜秀氏（評論家）
長木誠司氏（東京大学准教授）
袴田麻祐子氏（グローバルCOE研究員）
以上4名によるシンポジウム

2008年1月12日（土）13：00～17：30／早稲田大学小野記念講堂

この研究集会は、山田耕筰作曲のオペラ『黒船—夜明け』（1939）の新国立劇場公演に合わせて行われたものである。第一部の著名な音楽家と演出家による基調講演では、オペラという輸入芸術を、日本に根付かせるために行われたさまざまな努力や試みについて、率直に語って頂いた。両氏の深い学識と豊かな経験から、印象深いエピソードが語られ、質疑応答も活発だった。4人の研究者による研究発表では、日本におけるオペラの受容と、オペラ作品に捉えられた日本の姿を、それぞれの専門的な立場より語って頂き、受容史を理解するとともに、日本におけるオペラ芸術の未来について、様々な思いをめぐらす契機となった。

■ ベケットゼミ特別セミナー

講師：アンジェラ・ムアジャーニ氏（メリーランド大学名誉教授）
2008年1月18日（金）13：45～15：45
早稲田大学戸山キャンパス表象メディア専修室
2008年1月31日（木）14：40～16：40
2008年2月15日（金）14：40～16：40
2008年2月28日（木）14：40～16：40
2008年3月13日（木）14：40～16：40
2008年3月27日（木）14：40～16：40

西洋演劇研究コースでは、2008年1月から3月までアメリカの著名なベケット研究者であるムアジャーニ氏を客員教授としてお迎えし、英語での集中セミナーを開催する。氏は研究者としてだけでなく教育者としても名高い。このセミナーも受講生にとって単なる受身の授業となるのではなく、自らの研究内容を国際的な場で発信するための能力レベルアップの場として活用されることを意図している。

（客員講師 川島健・客員研究助手 村瀬民子）

東洋演劇研究コース 活 動 報 告

2007年12月2日、大阪府寝屋川市の摂南大学地域連携センターにて、GCOE客員講師で摂南大学教授の瀬戸宏氏の主催により、中国20世紀初頭に誕生した伝統演劇とは異なる新しい演劇である「文明戯」研究の最新の成果を、3名の中国人研究者が発表する文明戯研究会が開催された。この研究会は、2007年2月に21世紀COEプログラムの演劇理論研究（東洋）コースが主催した「春柳社百年記念国際シンポジウム」での成果を継承するもので、参加者15名のうち東洋演劇研究コースから、事業推進担当者、客員講師、研究協力者、客員研究助手、研究員ら合わせて10名が参加した。また発表者の一人である顧文勲氏（南京大学）は上記の国際シンポジウムに際しても発表されている。使用言語は中国語である。

陳凌虹（総合研究大学院大学研究生）氏の発表「『脚本 不如帰』と『家庭恩怨記』—そのメロドラマ的性格をめぐって」（コメント 三須祐介）では、柳川春葉の脚色を中国において翻案した『不如帰』と、『家庭恩怨記』という、文明戯の代表作2作を詳細に比較し、「メロドラマ」をキーワードに分析された。顧文勲（南京大学）氏の発表「新劇プログラム通覧」（コメント 飯塚容）では、氏が長年にわたり収集されてきた1910年代から20年代における60の文明戯公演プログラムが紹介され、それらの情報から当時の公演の実状を考察し、各劇団における公演の特色や入場料などが明らかにされた。曹路生（上海戯劇学院）氏の発表「話劇『弘一法師』創作を語る」（コメント 田村容子）では、氏が2007年の中国話劇百周年を記念して創作した、文明戯創始者の一人である李叔同（1880-1942）を主人公にした話劇の創作過程を話されるとともに、中国における話劇百周年記念関連活動の状況について報告された。なお東洋演劇コースでは文明戯を引き続き研究テーマの一つとし、来年度中に「春柳社百年記念国際シンポジウム」の論文集を刊行する予定である。

（客員研究助手 森平崇文）

舞踊研究コース

活 動 報 告

平成19年度は「舞踊研究の現在—理論研究と分析研究の交錯地点をズームアップする」というテーマのもと、舞踊理論研究(美学・史学など)と作品・技法・演技などの分析研究、それらの融合した研究方法とその成果を検討することを目的にして5回の研究会を開催した。研究員と客員講師による研究発表は以下の通りである。

平野恵美子「20世紀初頭のロシア帝室劇場のバレエとバレエ・リュスについて」は、ロシア政府の定期刊行物『劇場年鑑』から当時上演されていたバレエ作品傾向を分析することによって、本国ロシアでの形成過程と位置づけを明かにした発表。富燦霞「台湾における京劇戯曲舞踊の基本技法研究」は、『中国舞譜』（李天民、1976）に整理された京劇戯曲舞踊の基本技法を身体部位（頭・手・足・胴体）毎に整理し、さらに作品における役者の演技から基本技法の表現特徴を考察した発表。小林奈央子「ワシリー・カンディンスキーの舞台コンポジションにおける身体性と運動」は、初期4作品（1908—1909）を対象にした継続研究であり、今回は、〈舞台コンポジション〉作品の登場人物の身体像とそこに用いられた運動の考察より、東方正教会の聖像画（イコン）が作品の身体像に及ぼした影響を逆遠近法を中心に考察した発表。稲田奈緒美「土方巽・暗黒舞踏の身体性—モダニズムの身体から非統合の身体へ」は、土方巽の作品やメソッドなどの分析を通して土方舞踏を実証的に考察した発表であった。糟谷里美（客員講師）「舞踊分析法（舞踊記譜法、ラバンシステム分析法）と舞踊研究の実践」は、現在、世界各国で用いられ発展し続けている舞踊分析法を紹介する発表であり、北村明子（客員講師）「メディアとしての身体と表現の技法」は、ホラー映画『回路』（黒澤清）に現れた幽霊（本人が出演）の歩行を事例とし、日常生活の中の無意識的、かつ基本的な歩きの様々な表現可能性について考察した発表であった。



第5回は国際研究集会（1月29日-30日）を、舞踊分析法の第一人者であるジャネット・ランズデール（英国サリー大学名誉教授）先生を招聘して開催。ランズデール先生による「ダンス研究への招待—舞踊研究に挑戦する学生たちに贈る授業—」と「ダンス研究への招待—ヨーロッパにおける舞踊研究の成果と展望—」。それを受けてのシンポジウム「ニジンスキー振付《春の祭典》再考」では、鈴木晶先生「《春の祭典》概説および振付の諸版について」、伊東一郎先生「ストラヴィンスキーの音楽が与えた衝撃」、沼野充義先生「レーリッヒの美術」、平山素子先生「『犠牲の処女』を踊って」（実演を含む）の発表を踏まえて質疑応答が行われ、あらたな視点から《春の祭典》を再考することができた。

いずれの研究発表においても、舞踊の実践をペーパー上に記述する手法の検討が重要な課題となっており、今後も、研究領域を超えた検討を重ねる必要性が確認された。

（事業推進担当者 片岡康子）

芸術文化環境研究コース

活動報告

芸術文化環境研究コースでは、芸術を取り巻く環境についての客観的分析とともに、現実の社会のなかで芸術文化の持続的発展を可能にする環境整備に向けた政策提言型研究の実現のために、国内外の研究者・専門家、芸術文化組織と連携をとりながら、さまざまな活動を行っている。2007年度後半の活動の中から、シンポジウム「公共劇場の10年」と、海外研究者講演会シリーズをとりあげて紹介する。

■ シンポジウム「公共劇場の10年」

2008年2月7日(木) 早稲田大学 大隈記念タワー地下多目的講義室

日本に公共劇場と呼ばれる芸術創造の場が誕生して10年あまりがたった現在、舞台芸術の公共性、パブリックを担う主体に関する問いをめぐって、これまでの歩みと現状を確認した上で未来への提言構築を行う目的で企画されたシンポジウムには、全国各地の劇場関係者を含む約70人の参加を得た。小林真理(東京大学)、松井憲太郎(世田谷パブリックシアター)、伊藤裕夫(富山大学)、相馬千秋(アーツネットワーク・ジャパン)らコース客員教員による問題提起に続き、後半では、前述の4名に加えて、中島諒人(鳥の劇場)、岸正人(山口情報芸術センター)をパネリストに迎えて公開ディスカッションが行われた。劇場制度や公共団体が設置した公立劇場の問題とともに、民間の舞台芸術活動の動向をも視野に入れることにより、演劇や舞台芸術そのものが内包する公共性の性質にアプローチする議論を行った本シンポジウムは、今後コースで継続的に行っていく研究の出発点となるものである。



■ 海外研究者講演会・公開研究会シリーズ(2007年度)

世界的に見ても新しい研究領域である芸術文化環境研究には、国際交流によるダイナミズムが相互の研究の深化にひときわ重要な意味を持つ。このためコースでは、2007年10月から2008年3月の期間に、フランス、ドイツ、マレーシア、シンガポールから次の各氏を招聘し、講演会・公開研究会を開催した。各国の芸術環境をより深く知るとともに、研究上の方法論をより確かなものとし、若手を含めた研究者・研究拠点の相互ネットワーク化を図ることを目的としている。

- ・2007年12月6日 ヴォルフガング・シュナイダー氏(ヒルデスハイム大学教授)
「劇場は存在しなければならない」ードイツの演劇政策、文化政策
- ・2007年12月12、14、18、19日 マリ＝マドレーヌ・メルヴァン・ルー氏(フランス国立科学研究所主任研究員教授)
ーアマチュア演劇研究、観客論
- ・2008年2月15、16日 スミット・マンダル氏(マレーシア大学准教授)ーマレーシアの芸術文化環境
- ・2008年2月17、18日 滝口健氏(シンガポール大学)ーシンガポールの芸術文化環境
- ・2008年3月7日 エマニュエル・ヴァロン氏(パリ第10大学教授)ーフランスの舞台芸術政策、都市文化政策
(客員研究助手 長嶋由紀子)

日本演劇研究コース

グローバルCOE研究会「人形浄瑠璃文楽」

「人形浄瑠璃文楽」コースは21世紀COEに引き続き、定期的に研究会を開催している。

演劇研究と映像研究の統合をめざすグローバルCOEの中での「人形浄瑠璃文楽」コースは、21世紀COEのテーマであった「復元的研究」に加えて、「文楽と映像」という新たな観点から文楽という芸能を考えてみたい。まず今年度は、文楽に関して過去に撮影された映像(劇場映画、文化映画、テレビ中継、記録映像など)の情報を収集・整理することから始めた。次の段階では、これらの映像作品のなかで文楽の芸の本質がどのようにとらえられてきたのかを考察したい。また、文楽の視覚的な要素である人形の演技については、21世紀COEではほとんど取り上げることができなかったのも、なんらかの方法でアプローチしたいと考えている。人形に関しては、実際の舞台に携わる演者の協力が不可欠で、スケジュール等の面で種々の困難が予想されるが、今後の文楽研究に資するような成果を挙げられればと思う。

(客員講師 桜井弘)

「典礼とパフォーマンス」

講師：フランツ・グリースホーファ氏(ウィーン民俗博物館前館長・ウィーン大学名誉教授)

(2007年12月11日(火) 早稲田大学大隈記念タワー・303会議室)

日本の人々には、クリスマスはキリスト教の祭礼としてしか意識されないことが多いのではないだろうか。だが、このキリスト降誕を祝う儀式慣習の背景には、興味深い民俗事象が数多く見出される。今回の講演では、オーストリア民俗博物館所蔵の貴重な博物資料をご紹介いただいた。クリスマスのオーナメントは、聖なるものであると同時に、聖書のさまざまな場面を演劇的に表現するものでもある。そしてまた、美しい自然を背景とする民衆の生活ぶりを、ときにはユーモアを交えながら記録にとどめるものでもある。

映像研究コース

活動報告

中国プロジェクト活動報告

本プロジェクトは、今なお詳細が明らかになっていない20世紀初期の中国における中国及び外国映画の上映状況の研究を行うものである。中国で初めて撮影された映画は、1905年に北京の写真館の庭で京劇を撮影した『定軍山』とされる。2005年に中国映画誕生100周年を迎えたことにより、2005年前後の中国では、中国映画史に関する様々な書籍が出版された。しかし『定軍山』は火災によって消失し、その後製作された無声映画も行方のわからないものが多い。中国における無声映画をとりまく状況については今なお研究すべき部分が多いといえよう。



本年度は、2008年1月12日より16日まで小松弘教授、研究協力者の佐藤秋成氏（城西国際大学専任講師）、グローバルCOE研究員である山本律が上海出張を行った。以下、時系列順に報告していく。

■ 中国映画史研究家インタビュー

上海大学映画・テレビテクノロジー学部石川准教授に、中国における無声映画研究状況についてのインタビューを行った。石川教授によると、中国で無声映画の研究が進んでいない理由のひとつは、20世紀初期の映画フィルムは博物館などでなく映画会社によって保管されていたので戦時中に多く消失したためであり、もうひとつは、政府の政策上多くのフィルムが破棄されたためである。中国で本格的にフィルムの整理が行われるようになったのは80年代に入ってからであり、20世紀初期の中国映画は実際に観ることができないものが多いため、映画研究もテキスト分析が主体となっている。石川教授からは多くの貴重な情報を提供していただいたので、今後紀要などで詳細を報告していきたい。

■ 古籍書店・骨董市場巡り

上海在住のライター山田泰司氏協力のもと、古籍書店・骨董市場巡りを行い、1920年代の9.5ミリの貴重なフィルム2本などを発見することができた。

■ 学術交流

復旦大学ビジュアル・アーツ学部の先生方と学術交流を行った。この学部は開設され間もないが、中国の著名な映画監督を客員講師として招くなど、映画分野にも積極的に取り組んでいる。交流としては、全体での意見交換のほかにグループに分かれての意見交換も行い、様々な角度から中国の映画研究状況を知ることができた。

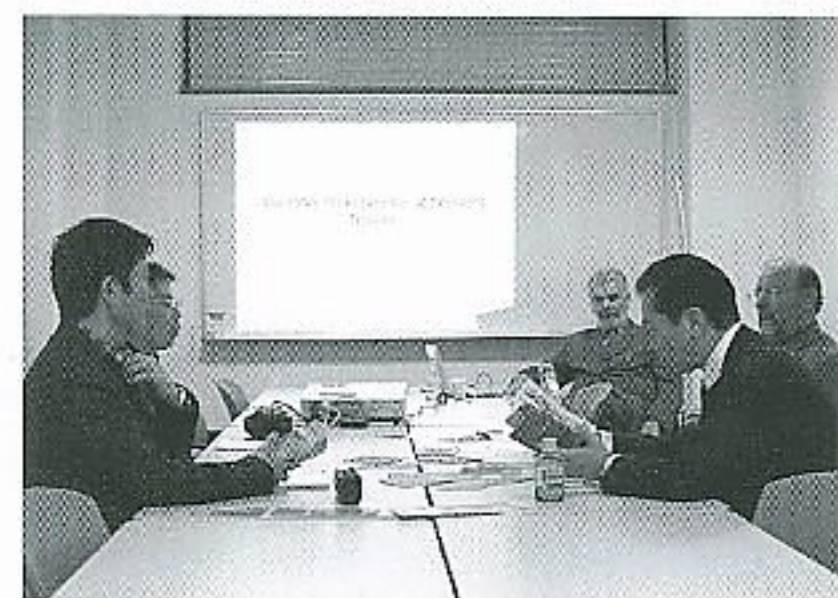
■ 資料調査

上海図書館にて、20世紀初期に中国で出版された新聞・雑誌の調査を行った。事前調査により現地調査も順調に行われた。

今回の出張は、滞在時間は短かったが全てが順調に進み、貴重なフィルム・資料・情報を得ることができた。それも研究協力者の佐藤氏から多大な協力を得られたからである。改めて御礼を申し上げたい。（グローバルCOE研究員 山本律）

活動報告

グリースホーファー教授は、オーストリア及びアルプス系ドイツ文化圏における仮面劇や民衆劇に関する研究では、めざましい業績で知られている。今回は、2007年12月に開催された、早稲田大学演劇博物館のグローバルCOEシンポジウム「散楽の国際性」のパネリストとして来日いただいた。本講演によって、グローバルCOEプロジェクトの重要課題である「典礼とパフォーマンス」に関し、ヨーロッパの民俗も比較検討の対象として、研究のさらなる深化と今後の指針を得ることができた。（事業推進担当者 ギュンター・ツォーベル）



研究活動報告：能楽学会との共催による「いま読み解く狂言―釣狐」

2007年12月10日、午後6時より、能楽学会との共催による標記の研究会を、大蔵流狂言師山本則俊師・武蔵野大学能楽資料センター長で同大学教授の羽田昶氏の、お二人をお招きして開催した。まず羽田氏による狂言の秘曲〈釣狐〉についての総括的な発表があり、現在この作品について知られる情報を網羅することを通じて、本曲の持つ問題点や魅力について、論じられた。引き続いて、則俊師の提供された〈釣狐〉の舞台映像（山本則重師ほか出演）を見ながら、この曲の主要な秘伝についての分析を行い、能の〈道成寺〉に匹敵するとされる〈釣狐〉の構造を論じられた。プロの狂言役者による克明な秘伝開陳というのはこれまで例がなく、非常に興味深い発表となった。（事業推進担当者 竹本幹夫）

2005年5月30日、早稲田大学小野記念講堂で開催されたCOE公開講座「浄瑠璃」において、「木下蔭狭間合戦」壬生村の段が竹本綱大夫（人間国宝）・鶴澤清二郎両師により85年ぶりに復曲演奏された。当日は大雨にもかかわらず、大勢の方がオープンしたばかりの小野記念講堂に詰めかけ、会場に入られなかった方はモニターで聞き、また入場できずに帰られた方も少なくなかったと聞く。お二人の演奏は気迫のこもった見事なもので、聴衆に新鮮な感動を与えたことは、2年半が過ぎた現在でも鮮明に記憶に残っている。この時の音源が、このたびCDとなってコロムビアミュージックエンタテインメント株式会社から発売された。

浄瑠璃史に残るその日の名演が、こうしてCDとして市販されたことにより、いつでもどこでも何度でも聞けるようになったことをまず喜びたい。そして、同じくCOEの公開講座（2003年12月1日）で演奏された「竹中砦の段」も同様にCD化され、綱大夫師のライブワークがセットで聞けるようになる日のくることを、強く希望するものである。（客員講師 桜井弘）

『人間国宝 義太夫 九代目竹本綱大夫 「木下蔭狭間合戦」壬生村の段』

CD 1枚 解説リーフレット(16頁)付 (COCJ-34039) 録音時間:65分21秒

協 力:早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

早稲田大学21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

発売元:コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社

価 格:2,940円(税込) 発売日:2008年1月23日



2007年度博士論文成果報告会 EVENT CALENDAR

開催日:2008年3月19日(水) 10:00~17:10 発表時間:一人70分(うち質疑10分) 会場:早稲田大学国際会議場第3会議室

プログラム

- ① 10:00~11:10 永島 茜 (芸術文化環境研究コース グローバルCOE研究員)
フランス音楽政策の変遷とその新たな展開—公的関与の論理と政策理念の検討を中心として—
- ② 11:10~12:20 川島 健 (グローバルCOE客員講師)
ベケット・ポリティクス:サミュエル・ベケットと1930年代アイルランド・ナショナリズム
- ③ 13:30~14:40 間瀬幸江 (西洋演劇研究コース グローバルCOE研究員)
Formes narratives dans la dramaturgie de Jean Giraudoux (ジャン・ジロドゥの劇作術における語り的问题)
- ④ 14:40~15:50 千川哲生 (西洋演劇研究コース グローバルCOE研究員)
L'Art de raisonner, l'art de debattre: la dimension argumentative dans les tragedies et la theorie de Pierre Corneille (ピエール・コルネイユの悲劇及び理論における論証法的側面)
- ⑤ 16:00~17:10 岡室美奈子 (事業推進担当者)
Beckett the Medium: Elective Affinities with Yeats and Joyce (メディアム〈メディア/媒体/霊媒〉としてのベケット—イエーツ、ジョイスとの親和力)

編集後記

グローバルCOE拠点における第1号のニューズレターということで、客員研究助手に着任して数ヶ月足らずの状況で開始された編集作業は難航するかと考えていたが、その懸念はすぐに消えた。各コースからの様々な内容の活動報告が飛び交い、紙幅の都合により、やむなく掲載企画を取捨選択せざるを得なかった場合もあったほどである。年度末で雑務に追われていた中で、共同作業で感じられた濃密な時間は助手達の業務に違った彩りをもたらしてくれたように思える。

しかし、これらは編集作業に加わった助手達の尽力によるというよりも、主として21世紀COE事業以来、先生方や助手の方々、事務局の方々等が時間をかけて積み重ねられてきた結果によるのは言うまでもないことであり、今後も助手一同、発刊に尽力していく所存である。

(映像研究コース客員研究助手 後藤大輔)

News Letter 第1号

2008年3月15日

編 集:後藤大輔 埋忠美沙 長嶋由紀子 村瀬民子 森平崇文

発行者:早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL:03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>